

アストン『英訳日本紀』脚注抄訳稿（6）

虎尾 達哉

飴 (254)

[p201]

ame*

(254) アメ（甘み）は普通はキビから作られて麦芽処理されるので、構成上、わが国の化学者が「麦芽エキス」と呼んでいるものに近い。極東で好まれる砂糖菓子である。

すなはちあめをつくる おのづからになる
乃 造 飴、飴即 自成 (255)

[p203]

So he made ame, which forthwith became formed of itself*

(255) 土師記（旧約聖書）第6章第33節参照。

これよりはじめていつへのおきものあり
自此 始 有 嚴瓮之置也 (256)

It was with this that the custom began of setting sacred jars*

(256) 中庭に置かれたとする注釈もある。

たかみむすびのみことをもって みづから うつしいはひをなさむ
今以高皇産霊尊、朕親 (257) 作 顯 齋 (258)

We are now in person* about to celebrate a public* festival to Taka-mi-musubi no Mikoto

(257) ミカドはその司祭者的役割の多くを中臣氏に任せた。

(258) 古代の注釈によれば、日本語のウツシは「はっきりした」とか「目に見える」の意であるという。これはこの時期の神道儀式に、秘密に行われるものと公開でおこなわれるものとの区別があったことを暗示している。

いましをもっていはひのぬしとしてさづくるにいつひめのなをもってせむ
用 汝 為 齋 主、授 以 嚴 媛 之 号 (259)

I appoint thee Ruler of the festival, and grant thee the title of Idzu-hime*

(259) イヅ・ヒメとは怖い、または厳粛な皇女。日本書紀通証の注釈者¹⁰⁶によれば、伊勢、賀茂、春日の女性司祭者の例からわかるように、通常この役割を任されるのは女性であった。しかし、この時、誰も任せられる女性がいなかったため、道臣命がこの場合にふさわしい女性の名を与えられたという。

そのいつへのおものをたてまつり
天皇嘗其巖瓮之糧 (260)

The Emperor tasted* the food of the Idzube

(260) 行間の仮名はタテマツリ、すなわち“捧げた”。これは上文に記述されたニヒナメのご馳走のことを言っている。

伽牟伽筮能、伊斉能于瀾能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍慶、之多儂瀾能、之多儂瀾能、阿誤豫、阿誤豫、之多太瀾能、異波比茂等倍離、于智弓之夜莽務、于智弓之夜莽務 (261)

(神風の 伊勢の海の 大石にや い這ひ廻る 細螺の 吾子よ 吾子よ 細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ 撃ちてし止まむ)

Like the Shitadami

Which creep around

The great rock

Of the Sea of Ise

Where blows the divine wind -

Lime the Shitadami,

My boys! my boys

We will creep around,

And smite them utterly

And smite them utterly*

(261) シタダミとは、リュウテンサザエ科の小さな貝。ただ、ここでその紹介をするのは、さほど適切とも思えない。おそらく、“数はリュウテンサザエのように”というような意味だろう。書紀集解の編者¹⁰⁷はシタダミは盗賊を表すと考えている。大石とはおそらく二見のミョウトイシ(夫婦岩)のことである。日本の絵にたいへんよく描かれている。アンダーソンの目録¹⁰⁸320頁、またはサトウとホーズの『中部・北部旅行案内』¹⁰⁹150頁を見よ。

おさか
忍坂 (262)

Osaka*

(262) 大和の。都市の大阪とは区別される。

於佐箇廼、於朋務露夜珥、比苔瑳破而、異離烏利苔毛、比苔瑳破而、枳伊離烏利苔毛、彌都彌都志、俱梅能固邏餓、勾鶯都々伊、異志都々伊毛智、于智弓之夜莽務 (263) [p205]

(忍坂の 大室屋に 人多に 入り居りとも 人多に 来入り居りとも みつみつし 来目の子等が 頭椎い 石椎い持ち 撃ちてし止まむ)

At Osaka

In the great muro-house,

Though men in plenty

Enter and stay,

We the glorious

Sons of warriors,

Wielding our mallet-heads,

Wielding our stone-mallets,

Will smite them utterly*

(263) ムローヤとは、穴の住居のことである。この詩では「槌の頭」が歌われているが、本文では続いて「槌の頭」の剣が出てくる。前者の「槌の頭」はこのままで正しく、石の武器のことを言っているのは疑いない。「石の槌」とは、間違いなく前に図示した武器のことである。「槌の頭」と「石の槌」は、名は違っているが、恐らく同じものであろう。

またのこるものなし
虜、無復嚙類者 (264)

so that there no eaters left' *

(264) つまり、誰も生き残らなかった。

愛瀾詩鳥、毗儻利、毛々那比苔、比苔破易陪廻毛、多牟伽毗毛勢儒 (265)

えみし 一人 もも 人は云へども 抵抗もせず

Though folk say,

That one Yemishi

Is a match for one hundred men,

They do not so much as resist**110

(265) エミシはアイノ、またはより正確にはアイヌである。その末裔は今も何万人かがエゾ島に居住している。「日本紀」が書かれたころは、彼らはまだ日本の本州の広大な地域を占めていたし、もっと早い時期には、大和の西の方にも勢力を広げていたことが地名から立証されている(帝国大学から刊行されたチェンバレンの論文¹¹¹をみよ)。しかしながら、この詩の記述から何であれ結論を引き出すことは危険である。「日本紀」の著者には、古代の詩を地の文の中にかなり恣意的にはめ込む習癖があるからだ。古事記はこの詩を省いている。エミシもしくはエビスは一般に野蛮な民族に対しても用いられるが、こちらがおそらくは本来の意味であろう。多分、スヤシで終わる擬音語の一群の中に加えられるべき語である。また、エビスの b やエミシの m は barbarian や babble や murmur などの b や m と同じ機能を有する。

伊莽波豫、伊莽波豫、阿々時夜塙、伊莽儻而毛、阿誤豫、伊莽儻而毛、阿誤豫 (266)

(今はよ 今はよ ああしやを 今だにも 吾子よ 今だにも 吾子よ)

Ho! now is the time ;

Ho! now is the time ;

Ha! Ha! Pshal

Even now

My boys !

Even now

My boys !*

(266) どうみてもこれほど原始的な詩はない。韻律は不規則だし、しかも、すべての日本の詩と同じく、散文と区別するための押韻や音節の長短や規則的な強音の繰り返しといったものがない。

ひらでやっ
葉盤八枚 (267)

[p207]

eight leaf platters*

(267) 常緑の榿の一種であるカシハの葉で作られた盛り皿。

哆々奈梅弓、伊那瑳能椰摩能、虚能莽由毛、易喻耆摩毛羅毗、多々介陪麼、和例破椰隈怒、之摩途等利、宇介譬餓等茂、伊莽輪開珥虚禰 (268)

(楯並めて 伊那瑳の山の 木の間ゆも い行き贍らひ 戦へば 我はや飢ぬ 嶋つ鳥 鶺鴒が徒 今助けに来ぬ)

As we fought,

going forth and watching

from between the trees

Of Mount Inasa,

We are famished.

Ye keepers of cormorants

(Birds of the island)

Come now to our aid*

(268) 韻律は、5音節と7音節の交互の詩行から構成され最後に7音節の詩行が加わる規則的なナガ・ウタに近い。鶺鴒たちに対し、軍の食料として魚を提供するよう求めている。

彌都々々志、俱梅能故邏餓、介耆茂等珥、宇惠志破餌介瀾、句致弭比俱、和例破洸輪例儒、于

智弓之夜莽務 (268)

(みつみつし 来目の子等が 垣本に 植ゑし山椒^{はじかみ} 口^{くちび}疼く 我は忘れず 撃ちてし止まむ)

My mouth tingles

Within the ginger planted

At the bottom of the hedge

By the glorious

Sons of warriors –

I cannot forget It :

Let us smite them utterly*¹¹²

(268) 「ショウガを食べた後にその味が長く口に残るように、兄の死への憤りの気持ちは心にとどまったままだ。忘れることなどできない。敵を叩きのめして仇をとろう」

瀾都瀾都志、俱梅能故邏餓、介耆茂等珥、阿波赴珥破、介瀾羅毗苔茂苔、曾廼餓毛苔、曾彌梅屠那藝弓、于苔弓之夜莽務 (269)

(みつみつし 来目の子等が 垣本に 粟^{あわふ}生には 蕪^{かみらひとと}一本 其根が本 其^そね^め芽^め繋ぎて 撃ちてし止まむ)

In the millet-field

Is one stem of odorous garlic : –

The glorious

Sons of warriors

Binding its shoots

Will smite it utterly*

(269) shoots としての語はメである。この語は女性をも意味する。これは疑いなく意図的である。ナガ・スネ・ヒコは家族と共に滅ぼされることになっている。

かちゆき
歩鞞 (270)

a foot-quiver*

(270) 歩兵の矢筒の意。

おしふるにきみたみのあひだをもつてすべからざる
不可教育以天人之際 (271)

It would be useless to instruct him in the relation of Heaven to Man*

(271) つまり君主と臣下。

物部氏之遠祖也 (272)

the ancestor of the Mono no Be House*

(272) 物部とは兵士であった。しかしながら、ここではその兵士たちの長を世襲した物部連もののべのむらじの
みを指している。

土蜘蛛 (273)

Tsuchi-gumo*

(273) ツチ・グモは「日本紀」では4・5箇所¹¹³、古事記では1箇所¹¹⁴に叙述されているが、それらはどれもみな日本史上のかなり伝説的な時期のものである。それらの叙述から知られることは、ツチ・グモが、いつも例外なくというわけではないが、ふつうは天皇の権威に抵抗する無法者であったということである。彼らは日本の名を持ち、大和、播磨、さらには九州といった日本の中で長く安定する地域に居住していた。先のエミシの話を除けば、彼らが日本民族ではないことを示唆するものは皆無である。思うに、「日本紀」に見える「短軀」などの描写は、ツチ・グモという名前がもつ手掛かりを基にした通俗的な想像の産物にすぎない。ツチ・グモとは文字通りには「土の蜘蛛」である。ところが、クモ（またはグモ）をクモリ、すなわち「隠れる」と語源の上で結びつけようとする語源学者もいる。その結果、彼らはツチ・グモを「土に隠れる者」とするのである。しかし、これはおそらく、違いのないものを区別しているにすぎない。「クモ」も「クモリ」も同根であり、われわれが spider つまり spinner と呼んでいる動物は日本では「隠れる者」という通称で呼ばれているからだ。その習性を観察したことがある者はみな、この通称が適切であることを疑わないだろう。ある日本古代の書物によれば、ツチ・グモは単なる俗名にすぎないという¹¹⁵。さすれば、われわれの clod-hopper とか bog-trotter といった語¹¹⁶との比較がなされるべきである。

上に言及した記紀のいくつかの箇所の一つでは、ツチ・グモたちは岩穴に居住する者として描かれているが、ほかの箇所では、ムロつまり地面の穴の住居に住むと書かれている。明らかにこのことがその名の起源となっている

古代の「風土記」つまり「諸国の歴史書」にはツチ・グモへの言及がいくつか見られるが、それらはおそらく「日本紀」や「古事記」で語られている古い伝説の単なる模倣にすぎないから、どれもツチ・グモについて重要な知見を付け加えるまでにはいたらない。ただ、諸風土記の中で、日向と肥後がこの無法者たちの集団で居住する地方として記述されていることは注目すべきかも知れない。

アンダーソンの大英博物館目録140頁を見ると、現代人の筆者がツチ・グモの蜘蛛概念を興味深く拡大している¹¹⁷。また、チェンバレンの“*KO-JI-KI*” 141頁と索引も見よ。

帝室博物館刊行の「博物叢書」という名の論文集に収められた「穴居考」¹¹⁸という掌篇は、ムロとツチ・グモに関する有用な知見をすべて集成している。

いのほふり
猪祝 (274)

Wi-hofuri*

(274) ホフリは神道の神官の一種である。日本民族ではない者がそのように呼ばれるなどありそうもないことである。

大軍集而 ^{いはめり} 満 於其地、因改号為 ^{いはれ} 磐余 (275)

a great army assembled and filled that country. Its name was accordingly changed to Ihare*

(275) fill を表す行間の仮名はイハメリであるが、この言葉については不明である。

是時、^{しき} 磯城八十梟帥、於彼處屯聚居…故名之曰 ^{いはみ} 磐余邑 (276)

At this time the eighty bandits of Katsuraki were encamped together here [...] Therefore that place was called the village of Ihare*

(276) 本注によれば、野営を表す漢字に相当する日本語はイハミであるが、この言葉についてそれ以上のことは不明である。

ついにあめのしたをしづむることをう
遂得安定区宇 (277)

[p213]

He was thereby at length enabled to establish the world * in peace

(277) world (区宇) は日本の天皇の領土を単に誇張して表現したもの、というわけではない。平田は日本の君主が全世界の正当な君主であることを根拠として、秀吉の朝鮮侵略を正当化している¹¹⁹からである。

下令 (278) 曰

The Emperor made an order*, saying:—

(278) 以下の演説内容はすべて、どの点をとっても完全に中国のものであるから、中国の学識が日本にもたらされる一千年以上も前から生きているはずの天皇がそのような演説を口にするのはあべこべとなる。こんな意見を言わねばならないこと自体、奇妙なことであるが、依然として「日本紀」のこの部分を史実とみなす著述家もいるのである。

みやこをひらきひろめておほとのをはかりつくる
誠宜恢廓皇都、規摹大壮 (279)

Truly we should make a vast and spacious capital, and plan it great and strong*

(279) 仮名表記はミ・アラカである。つまり「堂々たる神殿」、「堂々たる宮殿」。これは「壮」を「社」と読み替えたことを暗示している。

すにすみあなにすみて
巢棲穴住 (280)

They roost in nests or dwell in caves*

(280) 読者はこれを古代日本人の風俗や慣習を何がしか証し立てるものと取ってはならない。著者が中国に関する学識から想を得た一句にすぎない。

ひじりの わざ
何妨聖 (281) 造

in what way would this interfere with the Sage's action?*

(281) 天皇の行動の意。

あめのした いへ
掩八紘而為宇 (282)

the eight cords may be covered so as to form a roof*

(282) roof (屋根) とした漢字「宇」は宇宙をも意味する。八本の紐または巻尺はただ「あらゆる所」を意味するにすぎない。

檜原 (283)

Kashiha-bara*

(283) カシハは常緑の檜。ハラは平原。これは後に正式名称となる。ここではおそらく単なる描写であろう。

天皇当立正妃、改広求華胄 (284)

The Emperor, intending to appoint a wife, sought afresh children of noble families*

(284) 彼にはすでに妻がいたが、彼女は正妃とはみなされていなかったようである。

是歳為天皇元年 (285)

This year is reckoned the first year of his reign*

(285) 日本の歴史はしばしばこの年から始まると言われる。事實は、その後一千年近くにわたり、真に歴史の名に値するようなものは実在しなかったということである。この日付は紀元前753年にロムルスがローマを建設したときの日付と大変よく似ている。日付を決めるのに使用された当の暦はこのあと何世紀たっても、日本で作られたことはないし、知られてもいなかった。ブラムセン¹²⁰の“*Chronological Tables*”¹²¹とTASJの“*Early Japanese History*”¹²²を見よ。

故 (286) 古語称之曰

Therefore* there is an ancient saying in praise of this

(286) 先述のように、著者はしばしば、さしたる理由もなくこの語で始める。

於畝傍之榑原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原 (287)

In Kashiha-bara in Unebi, he mightly established his palace-pillars on the foundation of the bottom-rock, and reared aloft the cross roof-timbers to the Plain of High Heaven*

(287) 屋根の両端の垂木を上方に何フィートか突き出させるのが神殿や皇宮の特徴であった。これらはチギ(千木)と呼ばれた。チェンバレンの“KO-JI-KI” 311頁を見よ。今日の神道の神殿はこれで他と見分けられるのである。タカマガハラ(高い天の平原)を国名と考えている日本のエウヘメリズム¹²³信奉者たちはこの箇所をどう解釈するのだろうか。

今号来目邑 (288)

[p215]

now called Kume no mura*

(288) すなわち、クメつまり兵士たちの村。

たけだのあがたぬし
猛田県主 (289)

Agata-nushi* of Takeda

(289) 地方の支配者。

うだのもひとりら
菟田主水部 (290)

the Mohi-tori* of Uda

(290) モヒ・トリは、のちにはモンドリあるいはモンドとなるが、本来は宮殿への水の供給を職務とする役人であった。モンドノカミ(主水正)¹²⁴の任命はつい最近まで行われていた。

葛野主殿 (291) 県主部

the Agata-nushi of Katsurano and Tonomori* Be

(291) トノモリは宮殿や神殿の管理者。

乃立靈時於鳥見山中、其地号曰上小野榛原、下小野榛原 (292)

He accordingly established spirit-terraces amongst the Tomi hills, which were called Kami-tsu-wono no Kaki-hara and Shimo-tsu-wono no Kaki-hara*

(292) これらの名の意味はそれぞれ、「上の小さい原野の柿の平原」¹²⁵、「下の小さい原野の柿の平原」。「靈魂の土壇」(中国の表現)とは神道の祭礼のために聖域化された土地区画を意味するらしい。

もてみおやのあまつかみをまつりたまふ
用祭皇祖天神焉 (293)

There he worshipped his Imperial ancestors, the Heavenly Deities*

(293) この物語全篇を通して、神官の機能と王の機能とが合体していることに注目すべきだ。

すめらみこと
皇輿 (294)

The Imperial palanquin*

(294) 天皇その人を言おうとする時は、天皇の車や駕籠で表すのが丁寧だとみなされている。

うつゆ う まさく
雖内木綿之真迳国 (295)

Though a blessed land of inner-tree-fibre*

(295) 内木綿 (inner-tree-fibre) とはカジノキの樹皮の裏のことで、服を織るのに使用される。ここでは飾るための言い回し。

由是、始有秋津洲之号也 (296)

From this it first received the name of Akitsu-shima*

(296) アキ・ツ・シマの本来の意味は「収穫の地方」である。アキツ、すなわち蜻蛉とは関係がない。この昆虫は尾を口に加える姿がしばしば見られるのかも知れない。だとすると、身体が輪の形となる。山々の輪に囲まれた平地といった大和地方の外観から、原文でも直喩として蜻蛉が連想されたのだろう。のちに歴史家たちは日本をさらに羽根を拡げた蜻蛉に例えるように変わっていき、現在に至っている。

そらみつやまと
虚空見日本国 (297)

[p217]

Sora-mitsu-Yamato*

(297) 空・見た・大和。しかし、ソラ・ミツの真の意味は「空を充たす」、すなわちはるか遠い宇宙の果てまで達することである。こういう名前は単に詩的に創作されたものである。実際に使われていたわけではない。

時年一百廿七歳 (298)

His age was then 127*

(298) 古事記では137歳とする。¹²⁶

葬畝傍山東北陵 (299)

he was buried in the Misasagi* N.E.of Mount Unebi

(299) ミササギ(陵)は今でも日本、とくにゴキナイ(五畿内)すなわち主要五地方では数多く見受けられる。とりわけ河内と大和において夥しい。

古物研究家たちによれば、ミササギすなわちミカドの墓は、最も古い時代においては、簡素な小丘であった。しかし、時期は不明だが、おそらく紀元前2・3世紀のころ、高度に特殊化された形態の古墳が墓を目的として使われるようになり、その後大きな変化なく数百年続く。この古墳は二つの墳丘からなる。一つは円形で、もう一つは三角形の基部を持つ。両墳丘は図示したような様式で互いに接合し、全体が一つの濠で、または時として細長い土地を挟んで二つの同心円状の堀で囲まれている。円丘部では埋葬が執り行われ、もう一方はおそらく死者のために行われる諸儀礼の演壇となったであろう。側面から見ると、その外観は鞍状の丘であり、円丘部の方がもう一方よりいくぶん高い。時に、両墳丘の基部に二つのより小さな墳丘があることもある。ちょうど両墳丘が接合するくびれの箇所には張り出すようにつく。古墳の斜面は一定ではなく、段丘によって分割される。その段丘には2・3インチ間隔で粘土を型に入れて焼いた興味深い円筒が一行に置かれている。高さ1フィートから2フィート。直径6インチから14インチを数える。それらは土中に埋められ、その上縁がちょうど地表と同じ位置にくる。

場合によっては、というより、おそらくはほとんどの場合、ミササギの中には、モルタルを使わずに、切り出されたものではないいくつもの巨石で作られた大きなアーチ構造の部屋が存在する。そのアーチ構造の部屋の壁は上部に向かってしだいに傾斜し、上部は一つ何トンもするような大きな石の板によって覆われている。中に入るには、同様の石によって覆われた羨道による。

ミササギの中には石製や陶製の装飾棺が発見されているものもある。

以上の記述はチェンバレンの『日本事物誌』の中で筆者が書いた項目¹²⁷からの引用である。中国や朝鮮を旅行する人々は当地で古代の古墳を目にされるかも知れない。その折には、どんな古墳であれ、このミササギと比べていただきたいものだ。

W. ゴウランド氏は神武天皇陵と公認されている場所を尋ねている。私は氏から柵で囲われた場所は二か所あり、中に各々直径約18フィート、高さ約2フィートの二つの低い墳丘があることを教えてもらった。毎年4月3日にチョクシすなわち天皇の使者がこのミササギを訪れ、山・川・海の産物、すなわち鯛、鯉、海草、塩、餅(米を調理したもの)、蕨(シダの花?)、雉、鴨を捧げる¹²⁸。

神武の墓の場所については、日本の古物研究家たちの間でさえ問題となっている位だから、欧州の学者が何がしか疑問を呈したとしても、許してもらえらるだろう。サン・リョウ・シ(山陵志)¹²⁹9頁参照。

訳注

- 106 日本書紀通証は宝暦12年（1762）に谷川士清が著した書紀の注釈書。
- 107 河村秀根・益根。
- 108 William Anderson (1842-1900) の *Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese paintings in the British Museum* (1886). この目録150頁には KANO SCHOOL (狩野派) として、「1531 The Wife and Husband Rocks (Mito-Seki) of Futami ga Ura」が登載され、アンダーソンによる詳細な説明が施されている。なお、その末行には「See Satow and Hawes' 'Handbook for Japan', p.150」とあるから、アストンはこの一文を本書脚注にそのまま引用したことが知られる。アストンが日本美術に関してアンダーソンに大きな信頼を寄せていたことについては、拙稿「アストンの『和書目録』と挿絵評価」（下原美保編『近世やまと絵再考-日・英・米それぞれの観点から』ブリュッケ 2013年）を参照されたい。
- 109 *A handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (1881). 共著者のホーズは Albert George Sidney Hawes (?-1897). 英国人。海軍大尉として来日。退役後、幕末明治初期の諸藩・新政府で軍事指導にあたる。サトウと交友があり、彼の中中部地方への旅行に同行した。
- 110 アストンが英訳したこの歌謡と次の歌謡とは、現行の書紀では逆順に配置されている。この箇所について、日本古典文学大系『日本書紀』によるかぎり、諸本に異同は認められないから、アストンが何故両歌謡をこの順に訳出したのか不審である。
- 111 'The language, mythology and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies' (*Memories of the Literature College, Imperial University of Japan*. No.1) (1887).
- 112 この歌謡と次の歌謡も注109と同じく、現行の書紀とは逆順であり、諸本に異同は認められないから、やはり不審である。
- 113 書紀神武即位前紀己未年2月辛亥条、景行12年10月条、同18年6月癸亥条、神功撰政前紀（仲哀9年）3月丙辰条。
- 114 古事記中巻、神武東征説話の「到忍坂大室、生尾土雲（略）八十建、在其室待伊那流」に「土雲」（土蜘蛛）が見える。
- 115 常陸国風土記の茨城郡には「古老曰、昔在国巢」の記述があり、この「国巢（クズ）」についての注として「俗語都知久母」（俗の語にツチクモ）と記す。これを指すか。
- 116 clod-hopper には「田舎者」「馬鹿者」、bog-trotter には「アイルランドの田舎者」の意があり、いずれも侮蔑語である点に注意を要する。
- 117 「279 and 280. A pair of makimonos, on paper, painted in colours. Scenes from ancient Chinese and Japanese History」の説明文のうち、「7. Mono-no-funo Michi On no Mikoto attacking the demon Tsuchigumo(Erth Spider)」の絵について述べた下記の文がこれに該当する。

In the reign of the Emperor Jimmu (660-585B.C.) there appeared in the province of Yamato a monster, who was described as having a horned head, fiery red hair, eyes shining like mirrors, teeth like saws, six arms, and two legs. He was able to hurl massive stones, to rend rocks, up-root great trees, and spin out from his body white threads by which he could entangle man or beast. To rid the country of this direful pest the monarch sent his general to attack him, but the invulnerable Spider demon made terrible havoc amongst the troops, slaying many and putting the rest to flight. Then the Emperor adopted the stratagem of covering the monster's den with an iron net to prevent his escape, and heaping up burning fuel at the mouth of the cave, choked in its stronghold the creature that no sword or arrow could pierce. "This," says the text, "was the origin of strategy in warfare."

The Tsuchigumo is probably not a fable, but may have been evolved from traditions of a race of cave-dwellers, of whom traces are still to be found in many parts of Japan.

（神武天皇の時代、大和地方に、頭に触覚が生え、燃えるように赤い髪をして、鏡のように輝く目を持ち、のこぎりのような歯を持ち、腕が六本、脚が二本として描かれる怪物が現れた。彼は石の塊を投げつけたり、岩を引きちぎったり、巨木を根こそぎ引き抜いたり、人や獣を巻きこめる白い糸を体内から吐きだしたりすることができた。この恐ろしい厄介者を国から取り除くため、君主は将軍に命じて攻撃させたが、この弱点のない蜘蛛の悪魔は軍勢

を多数虐殺し、生き残った者たちをも吹き飛ばして、ひどい大損害を与えた。そこで、天皇は、怪物の巣穴を鉄の網で覆って逃げられないようにし、穴の入口に燃料を積み上げ、この剣も矢も突き刺さらない生き物をその棲家で窒息死させる計略を用いたのである。詞書には「これが闘いにおける戦略の起源であった」と書かれている。ツチグモはおそらく作り話ではない。穴居人たちについての伝承から発展してきたものかも知れない。今なお、日本の多くの場所で、彼らの痕跡が認められる)

- 118 黒川真頼「穴居考」(内務省博物館『博物叢書』所収、1879年)。なお、『博物叢書』の刊行は正確には皇室博物館(現東京国立博物館)ではなく、皇室博物館を管轄していた内務省博物館による。
- 119 玉櫛巻二において、平田篤胤は「此公(秀吉—引用者)は、皇国内のみに非ず、西戎国までも稜威を輝し給ひて、我が皇朝の尊きを知らしめむとぞ思されける。(中略)然るは、彼韓国に征給へるは甚じき大皇国の御光なるを、世には彼此に論へる者も有よしなるは、上代の御手風をし得しらぬ癡心になも有ける。其は天下の諸蕃国悉く我が皇大朝廷に仕へ奉るべき道理なるを、秀吉公さる由縁は知り給はざりつらめど、自然に上代の御由縁にも幽契といと有難き事なりかし。(下略)」と述べている。玉櫛は日本思想大系『平田篤胤 伴信友 大國隆正』(岩波書店1973年)に拠った。
- 120 プラムセンとは William Bramsen (1850-1881)。デンマーク人。母国の電信会社より電信士として明治4年(1871)に来日。のち郵便汽船三菱会社に採用された。年代学を研究して注121の著書があるほか、古銭学にも関心を持ち、*The Coins of Japan, Part I*も著している。長島要一「W・プラムセンの情熱—『和洋対暦表』と古代日本」(『図書』741、2010年)参照。
- 121 *Japanese Chronological Tables, Showing the Date, According to the Julian or Gregorian Calendar, of the First Day of Each Japanese Month from 645 A.D. to 1873 A.D. with an Introductory Essay on Japanese Chronology and Calendars* (1880)。日本語で明治13年(1880)1月に刊行した『和洋対暦表』の英語版を同年増補して刊行したものの。
- 122 Aston 'Early Japanese History', TASS vol.16 (1889)。
- 123 エウヘメリズム (euhemerism) とは、神話の神々は卓越した業績を成し遂げた太古の王や英雄の神格化から生じたとするエウヘメロス (Euhemerus) の説。神話史実説。『ランダムハウス英和大辞典』に拠る。
- 124 主水正は主水司という役所の長官。
- 125 アストンは書紀本文の「榛」字を persimmon (柿) と訳しているが、「榛」(ハシバミ、ハリ) に柿の意味はない。また、この箇所について、日本古典文学大系『日本書紀』によるかぎり、諸本に異同は認められない。あるいは「榛」の仮名「ハリ」の英字表記「HARI」を「KAKI」に誤ったものか。
- 126 古事記中巻神武記「凡此神倭伊波礼毗古天皇御年、壹佰參拾漆歳」。
- 127 項目「考古学」('Archaeology')。チェンバレンの『日本事物誌』(*Things Japanese*) は1891年刊行の第2版より、アストン寄稿の項目「考古学」が追加された。チェンバレンは第2版の序文(PREFACE)において、そのことを次のように記し、アストンだけではなくゴウランドへの謝意も忘れていない。
The article on *Archaeology* is from the pen of Mr. W. G. Aston, C.M.G., being founded on the joint investigations of that eminent scholar and Mr. W. Gowland.
- 128 神武天皇祭。現在でも行われている。
- 129 蒲生君平著。文化5年(1880)刊。山陵考証の書。

本稿は平成22～25年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)「幕末・明治期の先駆的英国人日本学者による国学の受容と評価」による成果の一部である。